

中期目標の達成状況に関する評価結果

東京芸術大学

平成29年6月

大学改革支援・学位授与機構

目 次

法人の特徴	1
(法人の達成状況報告書から転載)	

評価結果

《概要》	9
《本文》	15
《判定結果一覧表》	29

法人の特徴

大学の基本的な目標（中期目標前文）

東京芸術大学は、我が国唯一の国立総合芸術大学として、創立以来の自由と創造の精神を尊重し、我が国の芸術文化の発展について指導的役割を果たすことが、その使命である。この使命の遂行のため、下記のことを基本的目標とする。

1. 教育に関する基本的目標

- ・世界最高水準の芸術教育を行い、高い専門性と豊かな人間性を有した芸術家、芸術分野の教育者・研究者を養成する。

2. 研究に関する基本的目標

- ・国内外の芸術教育研究機関や他分野との交流等を行いながら、伝統文化の継承と新しい芸術表現の創造を推進する。

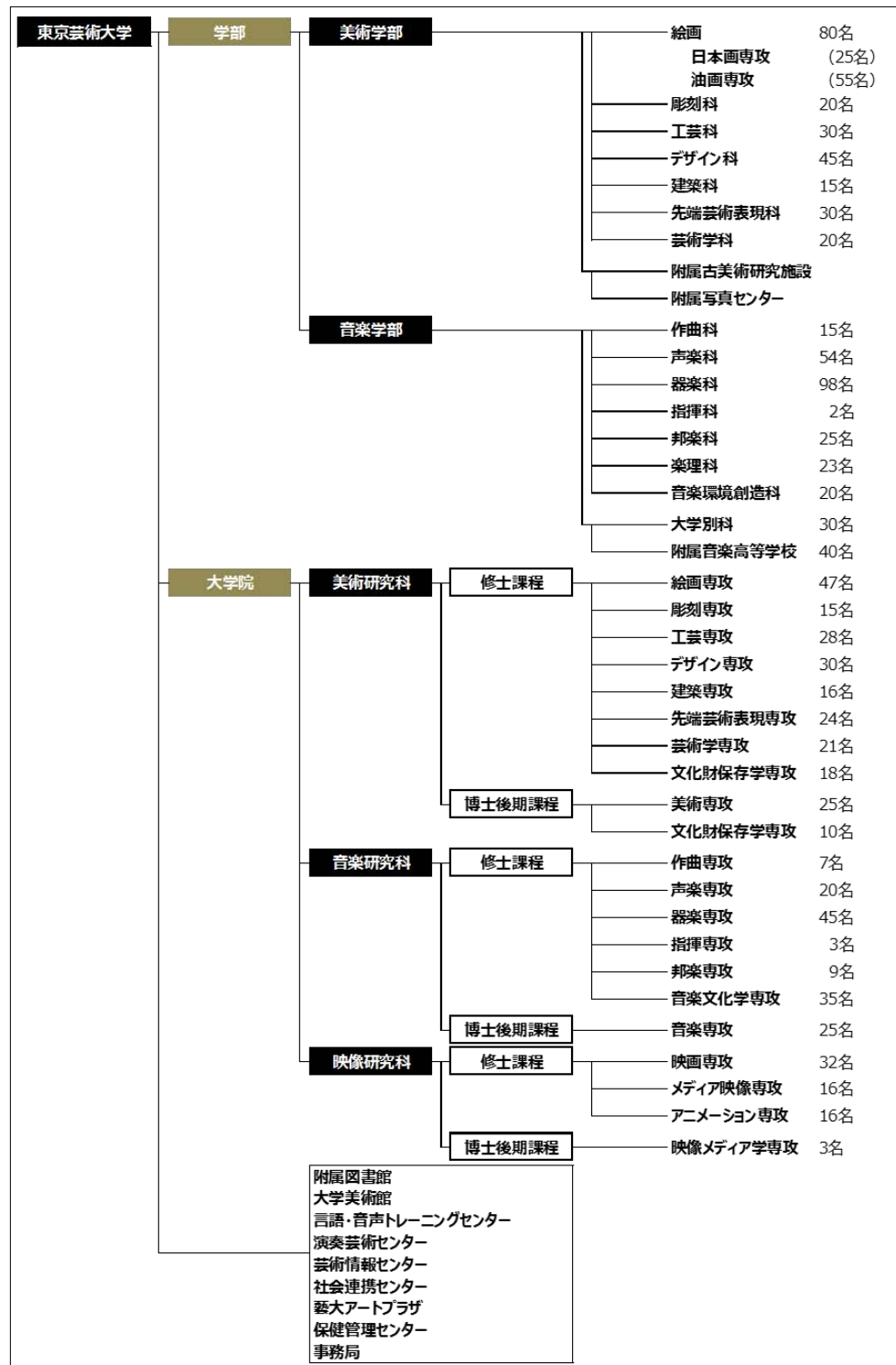
3. 社会との連携や社会貢献に関する基本的目標

- ・心豊かな活力ある社会の形成にとって芸術のもつ重要性への理解を促す活動や、市民が芸術に親しむ機会の創出に努める。

- 1 本学は、前身である東京美術学校、東京音楽学校の創立以来、128年の歴史があり、これまで、日本の近代美術史や音楽史に輝く多くの芸術家を輩出してきている我が国唯一の国立芸術大学である。美術学部は、絵画（日本画、油画）、彫刻、工芸、デザイン、建築、先端芸術表現、芸術学の各学科がある。音楽学部は、作曲、声楽、器楽（鍵盤楽器、弦管打楽器、古楽）、指揮、邦楽、楽理、音楽環境創造の各学科がある。大学院は、両学部の専門分野に対応した、修士課程、博士後期課程の専攻があり、さらに美術研究科には、独立専攻として、文化財保存学専攻が置かれている。また、映像表現分野を担う独立研究科として新たに設置された映像研究科は、映画、メディア映像、アニメーション専攻があり、平成27年度設立10周年を迎えた。
- 2 本学の専門教育の特色は、美術学部・美術研究科においては、主としてアトリエを中心とした制作活動、音楽学部・音楽研究科においては個人レッスンを中心とした個人指導、映像研究科においては、映像作品の創作活動によって、学生の実技修練、創造性の開発を図ることにある。そのため、教育方法については、1対多数ではなく、少人数指導または1対1のマンツーマンによる方法が、芸術教育の伝統的教育手法として確立されている。こうした伝統的手法による地道で、継続的な教育活動が、本学の大きな特色の一つである。また、新しい創造活動の基盤として、伝統芸術を専門的な見地から学ぶことを重視しており、数千年を超える伝統を持つ諸芸術を学ぶために、様々な授業科目を設けているほか、実地見学や特別講義・講演会といった機会を設けて、伝統的芸術技法を学生が習得できるように配慮している。
- 3 本学の教員の多くは、作家、演奏家として個々に「表現者」「芸術家」として成り立っていることが大きな特徴といえる。そのため本学教員の「研究活動」は、狭義のいわゆる学術的研究だけでなく創造的表現活動を含んでいる。その成果物は、論文等として発表されるのではなく、展覧会への出品、演奏会への出演などとして発表され、また、単に出品や出演するだけでなく、展覧会や演奏会、その他のイベントなどを総合的に企画・運営・実施することなどまで多岐に及ぶ。本学の教員にとって研究開発とは、新たな芸術表現の開拓や作品制作に他ならないため、各専門に留まることなく、分野横断による複合的な領域において、常に新しい芸術表現創造を模索している。

- 4 本学は、大学全体として、国立大学の中で唯一の芸術大学としての使命（即ち芸術家の育成と芸術創造の具現化）を果たすだけでなく、芸術をもって、より社会に貢献できる大学として各種の取組・活動を行うことを重視している。また、本学には、国宝・重要文化財から学生の卒業制作品まで約 29,000 点以上の所蔵品があり、国内有数の所蔵品数を誇る大学美術館と国内で最も音響効果の優れたコンサートホールのひとつである奏楽堂を有している。これらの施設は、本学の教育研究の場として活用されているだけでなく、各種の展覧会、演奏会が開催され、多くの一般の鑑賞者を集めており、本学の教育研究成果を社会に発信し、還元する場として十分な役割を果たしている。
- 5 本学は、美術分野では油画学科、音楽分野では器楽学科に代表されるように、西洋古典における美術・音楽表現の教育を受容してきたという経緯があり、必然的に海外、とりわけ欧米を志向し、学生や教員は積極的な留学や国際舞台での活動を行っている。また、日本画や邦楽をはじめ、日本古来の伝統的な技術手法に基づく芸術表現や、海外からの評価も高い映画やアニメーションなどは、我が国の文化そのものの発露であり、作品や研究成果を通じた異文化交流を実施し、海外関係機関との協定や連携を行っている。今日のグローバル化時代にあたっては、アジアにおける高等芸術教育の中心機関としての地位を確立し、各国からの留学生を積極的に受け入れるとともに、数多の芸術家・研究者・教育者を全世界に輩出している。

資料 東京芸術大学 教育研究組織の構成（平成 27 年度） 数字は入学定員



〔個性の伸長に向けた取組〕

明治開国以来、我が国の芸術教育の礎を築き、文化芸術発展の指導的役割を担ってきた歴史的経緯を持つ本学は、21 世紀以降の加速度的に変化する社会情勢の中、国立唯一の総

合芸術大学として、芸術分野の強み・特性を活かすという“オンリーワン”の戦略によって大学改革を断行することとし、その機軸として「グローバル展開戦略」を掲げた。

本学は常に世界を志向し、世界レベルの諸活動を展開してきた。その従来の取組を一気に開花させ、ロンドン芸術大学等海外からの一線級アーティストの招聘をはじめ、数々の海外一流芸術系大学等との連携強化、国際共同プロジェクトの実施のほか、共同作品制作、学生の海外派遣、留学生の受入を積極的に実施することとした。また、国内においては、国際芸術祭である越後妻有アートトリエンナーレ等地域アートプロジェクトによる成果発表、音楽分野では地方における小中学生を対象とした公開レッスンの実施など、芸術文化の向上とともに地方創生に資するものとして、国内全域における展開をみせている。加えて、世界に伍するトップアーティストの人材育成を戦略的に行うため、新しい大学院組織整備について制度設計を行ったほか、飛び入学を起点とする早期教育制度の構築を図った。

こうした「海外」と「国内」の両輪で芸術文化の活性化を行う一方で、これまで培ってきた伝統的手法から導かれる、新たな芸術表現分野の開拓も行っている。芸術におけるイノベーションの創出＝“アートイノベーション”と名づけられた一連の取組では、特許取得に至った高精彩複製技術を用いた作品による新たな芸術体験、今では消失してしまった文化財の高次元での復元、アンドロイドによる演劇表現をはじめとした芸術と科学の融合などが試みられ、その多岐にわたる革新的な成果は、展覧会・演奏会等で広く一般に公開されている。

さらに、東京オリンピック・パラリンピック競技大会の開催決定を受け、2020 年をターゲットイヤーと定め、本学が中心となり全国の芸術系大学と連携し、数々の文化プログラムの実施計画をたてることとし、また、本学の立地する上野地区は、国内唯一の芸術文化関連施設の集積地であり、その利点を活かし、世界文化交流の拠点化を目指す「上野『文化の杜』新構想」の推進会議を設置するなど、本学の教育研究機能を最大限に発揮し、グローバル化時代における社会貢献を実施している。

芸術表現というグローバルツールを武器に、戦略的に国内外での展開をみせることで、文化芸術立国としての我が国の繁栄に寄与すべく、本学のプレゼンス向上を図っている。

（関連する中期計画）

- 計画 1－（1）－3－2 【6】（P. 14）
- 計画 1－（2）－1－1 【7】（P. 24）
- 計画 1－（2）－1－2 【8】（P. 32）
- 計画 1－（2）－2－2 【12】（P. 43）
- 計画 2－（1）－1－1 【19】（P. 59）
- 計画 2－（1）－1－5 【23】（P. 77）
- 計画 2－（2）－1－2 【25】（P. 84）
- 計画 3－（1）－1－1 【27】（P. 90）
- 計画 3－（2）－1－1 【31】（P. 121）
- 計画 3－（2）－2－1 【32】（P. 123）
- 計画 3－（2）－2－3 【34】（P. 125）

〔東日本大震災からの復旧・復興へ向けた取組等〕

震災から復興への歩みは、人の心、人と人とのつながりを回復・再生するものとして、奇しくも文化芸術の価値を改めて呼び覚ます契機ともなった。そこで本学では、「芸術の力」を活かした、芸術にしかできない復興支援を、“オール藝大”体制で全学的に取り組んでいく。

美術分野では、復興支援作品展の開催やアート作品頒布によるチャリティー活動をはじめ、慰霊記念像の制作、建築分野の知見を活かした復興まちづくり事業の協力などを実施しており、なかでも、本学が有する文化財保存・修復の技術を活かした被災作品の復元、文化財ドクターの派遣等による支援は特筆される。当該支援により、震災によって甚大な被害を受けた美術館等の所蔵作品を多数修復したほか、津波により消失した、本学との縁深い「六角堂」の再建協力を行った。

また、音楽分野では、復興支援チャリティーコンサートの開催、被災地域における演奏指導（音楽アウトリーチ活動）や早期教育等を実施しているほか、映像分野では、ドキュメンタリー作品制作により震災・復興記憶のアーカイブ化を行った。当該作品は被災地での上映会や映画祭など、各地で上映されている。

さらに、学生ボランティアや教員個人による活動支援もさかんに行われている。「ふたばの教育復興応援団」は、小泉進次郎復興大臣政務官（当時）の呼びかけにより、福島県双葉郡の教育復興を応援しようという各界の有志により 2014 年 7 月に設立され、本学からは宮田亮平学長、平田オリザ特任教授が参画している。福島県立ふたば未来学園高校において、アート作品や演劇の持つ力を活かした「未来創造ゼミ」を実施するなど、福島県双葉郡の教育復興を支援した。

資料 主な東日本大震災からの復旧・復興へ向けた主な取組例

No.	年度	事項	活動実績
1	23	文化財ドクター派遣事業	東日本大震災後、5月から開始された文化庁・日本建築学会による文化財ドクター派遣事業に参加し、栃木県の文化財建造物を担当した。5月～10月に計5回の被害状況調査を実施、9月～12月に計3回の復旧の現地指導を行った。
2	23	茨城大学六角堂 宝珠復元研究	東日本大震災の津波によって、明治38年に岡倉天心が建設した六角堂は、津波により土台だけ残して流失するという甚大な被害を受けた。海中調査の結果、建物頂部の宝珠の破片を複数発見。これらの破片から3Dデジタル技術で形状を復元し再建に協力した。
3	23	被災文化財のレスキュー	海水で被災した紙資料の救助のために必要な洗浄の効果を実際に検討し、現状の方法で問題無いことを明らかにし、その結果を奈良文化財研究所の研究集会（2011年12月）などで公表した。
4	23	震災復興アーカイブ作成	せんだいメディアテークが開設した「3がつ11にちをわすれないためにセンター」と協力し、大学院映像研究科学生で構成する複数の撮影チームを継続的に派遣して震災復興の記録映像を制作し、震災復興アーカイブ作成を支援。その成果は『なみのおと』としてまとめられ、10月の山形国際ドキュメンタリー映画祭2011で公開され、その後、被災地での上映会や映画祭など、各地で順次上映された。
5	23	被災地美術館応援企画 「今、美術の力でー被災地美術館所蔵作品からー」（8月2日～21日）	被災地美術館の所蔵品から、今回の震災及びかつての震災や原発事故に関連する作品や、復興を支えるような表現をもった地元ゆかりの作家による作品などを選抜し、一つの会場に結集することで、厳しい現状を乗り越えるエネルギーとしたいとの願いから本展を企画。
6	23	チャリティーコンサート 「故郷」（ふるさと）～被災地出身演奏家の祈りに応えて～	2011年4月3日に行われたフランスのボーヴェ大聖堂にてチャリティーコンサートのリハーサル時に「難民を助ける会」等の関係者が集まり、本学教授から、震災被災者のために音楽を通した復興支援を行いたい旨を伝えたことがきっかけとなる。宮城県石巻市出身、東京藝術大学音楽学部卒で、現在東京フィルハーモニー交響楽団のトランペット奏者の呼びかけとし、「故郷」（ふるさと）チャリティーコンサートを開催した。 ウインドオーケストラ（吹奏楽団）は、今回の趣旨に賛同した被災地出身等の演奏家75名、合唱20名、制作スタッフ等が参加、そのほとんどを東京藝術大学関係者やOB等で構成。 また、津波で楽器を全て流された石巻市の小中高等学校へ募金及び寄附金を原資として楽器を寄贈。

7	23	Save Tohoku in 松戸（音楽学部教員，学生）	河川敷やギャラリーでコンサートやトークイベントを行い，支援物資の寄付を募った。NPO 法人や東北大学と連携して実施。
8	23	学生による被災地でのボランティア活動	【現地ボランティア】 B2：学生2名： 5月1日～4日（岩手） B4：学生2名： 5月3日～6日（仙台） M2：学生1名： 5月7日～1ヶ月間（被災地各所） M1：学生2名： 5月15日～22日（岩手，宮城，福島，茨城の被災地各所） 学生2名： 5月19日～20日（仙台） M2：学生1名： 5月21日～25日・28日～6月1日（福島県相馬郡新地町） 学生1名： 5月29日～6月1日（石巻・牡鹿半島） 【メディア棟内における被災写真の洗浄】 M1：指導教員の立ち会いのもと，学生10数名による被災写真の洗浄作業を行った。 期日：8月17日，19日，22日，23日，24日 場所：取手校地メディア教育棟ピロティーギャラリー 作業：約7万枚の写真の洗浄
9	24	「日本一美しい漁村」をめざし，石巻市雄勝の地区特性を活かした復興住宅モデルづくり等事業	震災直後から復興まちづくり協議会及び石巻市雄勝総合支所と連携し，地域の固有性を継承する集落再建をめざすプロジェクト。石巻市雄勝各浜マスタープランの制作（建築）を行う。
10	24	陸前高田みんなの家建設工事	東日本大震災で津波被害をうけた陸前高田にて，仮設住宅に暮らす市民が集うことのできる「みんなの家」を構想，設計，工事監理，一部施工を行った。また，建設費の資金集めも行った。さらに，ヴェネチア・ビエンナーレ建築展にて日本代表の展示者として，模型などをつかってプロセスの展示を行い，被災地における建築の意義，可能性を自ら問い，表現した。
11	24	岩手県陸前高田市普門寺地藏堂の設計監修	保存修復彫刻研究室では，平成 23 年度に，東日本大震災の被災者の冥福のため，「高田松原」の倒木を用いて親子地藏像を造立した。保存修復建造物研究室では，地元の陸前高田市の普門寺に，その親子地藏像3軀を奉安する地藏堂を設計し，その建設を指導した。
12	24	栃木県指定文化財建造物金鈴荘の災害復旧	金鈴荘は，真岡市の豪商岡部氏により，明治前期に建てられた近代和風建築の離れである。2階建，桧瓦葺で，東日本大震災によって，外壁のなまこ壁が大きく崩落し，軸組もかなり変形した。所有者の真岡市は昨年からの復旧の準備に取りかかり，栃木県と協議の上，24年度に復旧工事を行うことになった。この保存修復工事について，全体計画，保存手法などの指導を行い，25年3月に完了した。
13	24	真岡市登録文化財建造物旧下野紡績所の災害復旧	旧下野紡績所は明治 29 年に創業されたが，後に廃止となり，一部が民間に払い下げられたものである。平屋建ての木造，外壁大谷石積の構造形式で，東日本大震災によって，軸組と外壁の一部が損傷した。日本ナショナルトラストの震災復旧助成を受けて，24年度に復旧工事を行うことになった。この保存修復工事について，全体計画，保存手法などの指導を行い，25年3月に完了した。
14	24	石巻文化センター所蔵作品の応急修理	東日本大震災で被災した石巻文化センター所蔵作品を 31 点応急修理のため受け入れ，約半数の作品の応急修理を完了した。
15	24	平成 24 年度の文化財ドクター派遣事業への参加・協力	「東日本大震災文化財建造物復旧支援委員会（事務局：社団法人日本建築家協会）」が設置され，文化財ドクター派遣事業が進められることになった。事業内容のうち，23 年度調査のフォローアップ調査（23 年度に調査した被災文化財建造物の経過調査）について，専門家として栃木県を担当し，完了した。
16	24	工芸基礎 1 年集中講義「アーティストが考える復興支援のカタチ」	本学の卒業生で集中講義講師の亀井伸二氏が立ち上げた「サボサボ project」の概要を学び，学生がワークショップ形式で制作した作品を実際に展示販売し，復興支援活動を行っている NPO などに対して資金援助活動を行った。

17	24	東北関東大震災チャリティーコンサート（埼玉県入間市）	埼玉県入間市武蔵ホールで開催され、このコンサートの収益金は、東北関東大震災の支援金として日本赤十字を通して全額寄付された。
18	24	東日本大震災メモリアルコンサート（茨城県神栖市）	東日本大震災から一年の日に、茨城県神栖市文化センター大ホールにて開催された。会場にて募金を募り、震災の被害を受けた神栖市に寄付された。
19	24	東日本大震災復興アーカイブ支援プロジェクト	宮城県仙台市のせんだいメディアテークが開設した「3 がつ 11 にちをわすれないためにセンター」と協力し、平成 23 年 7 月から大学院映像研究科学生及び修了生によるチームを継続的に派遣して復興の記録映像を撮影し、アーカイブ作成を支援する東日本大震災復興アーカイブ支援プロジェクトを実施。またその映像をドキュメンタリー映画として取りまとめ、昨年度は『なみのおと』、今年度は『なみのこえ』を各地の映画祭や上映会で公開した。
20	25	いわき市勿来地区の津波被災者が実体験を遺すタイムカプセル事業	震災の記録を収集しタイムカプセルに収め、将来の地域防災に活かすために後世に伝え遺すことを目的とするタイムカプセルの委託事業調査を実施。
21	25	『文化遺産とまち、ひと、復興』プロジェクト	文化庁・気仙沼風待ち復興検討会等が主催し、宮城県を中心に各地の文化遺産の被災と復旧の状況を報告するもので、文化遺産がふるさとの復興に果たす意義や、さらなる支援の必要性について呼びかけた。保存建造物研究室と筑波大学の学生が中心となり、宮城県各地の有形・無形の文化遺産について、これまでの取り組みについて現地調査を行った。2013 年 9 月に宮城、12 月に東京で、それぞれシンポジウムを行い報告した。
22	26	石巻市雄勝大浜地区防災集団移転促進事業サポート	雄勝総合支所において行われる、大浜地区防災集団移転事業に係る住民説明会に参加。精密な模型を制作し、造成についての説明補助・まちなみの創造、集会所建設等のアドバイスをを行った。
23	26	クズのトンネル	東日本大震災で被災した「アクアマリンふくしま」の復興計画である「クウェート・ふくしま友好記念日本庭園」のアプローチの構造設計及び現場制作を行った。同庭園は、人工の埠頭全体を須賀（防潮林）で津波から護り、その内側に、浜通りの水源である阿武隈山地の森と水系流域の自然と空間を再現した。
24	26	日立システムズホール仙台復興支援演奏会	声学科、菅准教授監修による復興支援演奏会。菅准教授、地元の方々、藝大学生が共同での演奏会を実施した。
25	26	伊達市吹奏楽きらめき事業	年に 5 回現地に出向いて指導を行い、5 月には地元の中学生たちの伊達市ジュニア・ウィンドオーケストラとの吹奏楽合同演奏会を開催、また、11 月 23 日の吹奏楽定期演奏会には、中学生及びきらめき事業にかかわる先生方、約 150 名を奏楽堂に招待した。
26	26	ふたばの教育復興応援団	「ふたばの教育復興応援団」は、福島県双葉郡の教育復興を応援しようという各界の有志により 2014 年 7 月に設立。 「前例なき環境には、前例なき教育を」の想いで、双葉郡の中高一貫校となる「ふたば未来学園高校」開校にあたる校歌や制服の制作協力、双葉郡内小中高校の授業や部活動への協力のほか、子供たちが地域との絆を深める行事等への協力等を行う。 本学からは宮田亮平学長、平田オリザ特任教授が参加。
27	27	藝大アウトリーチ in 宮城	11 月 14 日～11 月 16 日 栗原市、気仙沼市、登米市等自治体や教育委員会等と連携し、本学教員と学生によるワークショップとコンサートが一体となったアウトリーチ活動を展開。
28	27	展覧会開催 東日本大震災復興祈念・新潟県中越地震復興 10 年 「法隆寺一祈りとかたち」	東日本大震災から 3 年を迎えるのを機に、復興を祈念して選ばれた、国宝・重文をふくむ約 70 件を展示。

評価結果

《概要》

第2期中期目標期間の教育研究の状況について、法人の特徴等を踏まえ評価を行った結果、東京芸術大学の中期目標（大項目、中項目、小項目）の達成状況の概要は、次のとおりである。

＜判定結果の概要＞

中期目標（大項目）	判定	中期目標（小項目）の判定の分布			
		非常に優れている	良好	おおむね良好	不十分
（Ⅰ） 教育に関する目標	良好				
① 教育内容及び教育の成果等に関する目標	良好		2	1	
② 教育の実施体制等に関する目標	良好		3		
③ 学生への支援に関する目標	良好		1		
（Ⅱ） 研究に関する目標	良好				
① 研究水準及び研究の成果等に関する目標	良好		1		
② 研究実施体制等に関する目標	良好		1		
（Ⅲ） その他の目標	非常に優れている				
① 社会との連携や社会貢献に関する目標	非常に優れている	1	1		
② 国際化に関する目標	良好		3		

＜主な特記すべき点＞

「戦略性が高く意欲的な目標・計画」に認定されている取組

- 音楽分野では、英国王立音楽院（英国）、パリ国立高等音楽院（フランス）等の国際交流協定校等から平成 27 年度に延べ 70 名の教員を招へいし、学生の個人レッスン時間を大幅に拡充している。また、ベルリンフィルハーモニー管弦楽団等、高等教育機関以外の世界的な芸術機関からも継続的に一線級の音楽家を誘致するなど、国際的な卓越教員を招へいしている。これらの取組により、平成 27 年度の教員一人当たりの学生数は、大学全体として約 2.7 名となっている。（中期計画 1-1 【7】）
- アートマネジメント、キュレーション、リサーチの 3 研究分野を持ち、専門領域によって分かれている芸術文化の様々な実践を横断的かつ有機的に結び付け、戦略的に企画・運営・発信し、芸術と社会との新しい関係を提案する人材を養成する国際芸術創造研究科アートプロデュース専攻の平成 28 年度設置に向けて取り組んでいる。また、既存の美術研究科・音楽研究科では、実践的に社会と関係し、日本独自の制作手法を強みにした新しい芸術の価値を創出し、発信する人材を育成するグローバルアートプラクティス専攻、オペラ劇場で歌手に必要とされる歌唱技術、国際的に通用する身体表現及び語学能力等を修得できる、専門的なプログラムを展開するオペラ専攻の平成 28 年度設置に向けた教育体制の整備を行っている。（中期計画 2-2 【12】）
- 国際舞台で活躍できる芸術家育成のための人材育成プログラムの開発として、美術分野では平成 26 年度にロンドン芸術大学（英国）、パリ国立高等美術学校（フランス）及びシカゴ美術館附属美術大学（米国）と国際共同カリキュラム（ジョイント・ディグリー）構築に向けた連携協定を締結している。この協定を受けて平成 27 年度に東京とパリ、ロンドン、シカゴにおいて、共同授業・制作・成果発表を行うグローバルアート国際共同カリキュラムを実施し、27 名の学生が参加している。また、音楽分野では平成 27 年度にリスト音楽院（ハンガリー）と大学間交流協定を締結し、共通学位の構築に向けて協議を進めるなど、国際共同カリキュラムの構築に取り組んでいる。（中期計画 2-1 【32】）
- 国際プレゼンスの確立及び国際発信を目的として、芸術分野固有の観点・指標等に基づき、芸術系大学の相対的な強み・特色等を明確化する芸術系大学ブランディング・システムの開発に取り組んでいる。平成 26 年度に戦略企画インテリジェンスユニットを設置し、近年の芸術系大学の取組、海外における評価制度の実態等、先導的ブランディング・システムの構築に関する指標の整理・予備調査・分析を実施している。また、愛知県立芸術大学、京都市立芸術大学、金沢美術工芸大学、沖縄県立芸術大学に事前調査等を実施し、システム構築の試行を実施したほか、世界大学ランキング等を運営する学外機関とも協議を進め、芸術系大学の評価に係る共同研究に向けた連携体制を構築している。（中期計画 2-4 【35】）

- 平成 26 年度に採択されたスーパーグローバル大学創成支援藝大力創造イニシアティブ事業の目標達成に向け、平成 27 年度に分野横断・融合型の研究を一層推進するため、教育組織と研究組織を分離し、芸術表現学系・芸術理論学系・芸術資源学系の 3 つの系により構成される教員組織として芸術研究院を新設するなど、研究教育組織の見直しを行い、海外の芸術系大学・機関等から延べ 169 名のアーティスト・クリエイターを教員・特別講師として招へいしている。（中期計画 1-1 【31】）

個性の伸長に向けた取組

- 東京スカイツリーから浅草を結ぶ地域において、複合的な芸術分野のプロジェクトを実施することで、街全体をミュージアム化し、新しい形のコミュニケーションを創出し、地域に貢献する芸術環境拠点の形成と新しい芸術の発信地となる地域創成を目指す芸大・台東・墨田（GTS）観光アートプロジェクトを平成 22 年度から平成 24 年度の間に実施するなど、連携協力による複合芸術教育として、多くのアートプロジェクト等を継続的に実践し、地域に貢献している。（中期計画 3-2 【6】）
- 音楽分野では平成 27 年度に国内の自治体、教育機関、企業等から 119 件の依頼演奏を受け入れている。また、コンサートを行うだけでなく、伊達市吹奏楽きらめき事業である吹奏楽指導、青淵文庫で聴くファミリーコンサート&たてもののレクチャーのように、訪問地の小・中・高等学校で、演奏指導や音楽普及活動等を実施することで教育研究活動の成果を地域に還元し、公共的な場における芸術表現の教育を実践している。（中期計画 1-2 【8】）
- 美術分野では、平成 25 年度に設置したアートイノベーションセンターで、フランスの至宝と呼ばれている貴婦人と一角獣タピスリーを、日本初公開となる展覧会に合わせ、大学の特許技術により現物の質感を忠実に再現し、高精細複製作品として発表している。また、音楽分野では、平成 24 年度に行った「カーリユー・リヴァー+隅田川」公演において英国の作曲家、ベンジャミン・ブリテンが完成させた教会オペラであるカーリユー・リヴァーをロンドン及びサフォーク州のオーフォードで、英国の演出家、指揮者、スタッフ及び大学の声楽、器楽、邦楽という専攻を越えた教員の連携により、2 曲の比較同時上演を行っている。また、映像分野では教員の映画監督作品である岸辺の旅が、平成 27 年度の第 68 回カンヌ国際映画祭に出品され、監督賞を受賞するなど、国際的にも高い評価を得ている。（中期計画 1-1 【19】）

- 国際的なネットワークを活かした学生・研究者支援策を更に拡充していくために、文化財の保存修復分野の研究を行っている敦煌研究院（中国）やベルリン芸術大学（ドイツ）等、海外の美術大学、音楽大学及び研究機関と連携関係を構築している。その結果、国際交流協定校・機関数は平成 21 年度末の 43 大学・機関から平成 27 年度末の 63 大学・機関へ増加しており、世界各地の大学・機関との国際交流を推進している。

（中期計画 1-2 【25】）

- 第 2 期中期目標期間（平成 22 年度から平成 27 年度）に毎年度、企業との共同主催事業である藝大アーツイン丸の内を開催しており、平成 27 年度に美術学部の学生によるストリートウォールペインティング、教員による計 7 回の出張講義及びスタインウェイ・ピアノによる藝大コンサート等を行っている。また、音楽分野では日本全国の小中学生を対象に、地元でのレッスンを実施し、幼少期から継続的・段階的に指導を行うことで優れた才能を開花させ、世界への飛躍につなげることを目指す早期教育プロジェクト（EEP：Early Education Project）を実施している。平成 25 年度に選抜した弦楽・管楽の学生 15 名と教職員 6 名をジュネーヴ音楽大学（スイス）に派遣、合同オーケストラを組織し、現地でオーケストラや室内楽の演奏を行っている。また、ジュネーヴ音楽大学の学生・教員を日本に招へいし、大阪及び東京で交流演奏会を実施している。このような企業、自治体、海外の関係機関等との連携により、第 2 期中期目標期間に 213 件の受託事業、10 件の早期教育プロジェクトを行うなど、芸術に関する多様な実践プロジェクトを実施している。（中期計画 1-1 【27】）

注目すべき取組

- 国内及びアジアの芸術系大学との多様な交流を強化し、アジアにおける芸術大学の拠点としての地位を確立するため、平成 22 年度から東京芸術大学アジア総合芸術センター事業を展開している。事業の成果として平成 24 年度に日本、韓国、台湾、モンゴル、インドネシア、ベトナム、タイ、シンガポール及びマレーシアから計 23 大学の学長等を招き、藝大アーツ・サミット 2012 を開催している。また、平成 26 年度に開催した藝大アーツ学生サミット 2014 では、日本、中国、韓国で芸術を学ぶ 81 名の学生が共同制作、演奏会を通して交流を深め、外部に向けて日中韓学生共作の美術・音楽・映像作品を披露するなど、アジア全域におけるより広範なネットワーク形成を推進している。

（中期計画 2-2 【33】）

- 海外留学及び海外研修の支援策の一つとして、各国の芸術祭や音楽祭への参加、海外芸術系大学との共同制作・演奏等、教員が専門分野の特色を活かして企画する海外実践型の研修授業 Arts Study Abroad Program (ASAP) を平成 26 年度から実施している。平成 27 年度にカンボジア石造世界遺産現場体験型プログラム等、計 11 件の活動に 86 名の学生が参加している。また、参加学生に海外派遣奨学金を給付するなど、日本人学生の海外留学支援に係る学内体制の整備、教育プログラムの構築・実施、経済的支援制度の拡充及び情報発信等を行い、国際交流増進に結び付く基盤整備を進めている。

(中期計画 3-2【37】)

＜復旧・復興への貢献・支援活動等に関係した顕著な取組＞

- 震災から復興への歩みは、人の心、人と人とのつながりを回復・再生するものとして、奇しくも文化芸術の価値を改めて呼び覚ます契機ともなった。そこで東京芸術大学では、「芸術の力」を活かした、芸術にしかできない復興支援を、“オール藝大”体制で全学的に取り組んでいる。

美術分野では、復興支援作品展の開催やアート作品頒布によるチャリティー活動をはじめ、慰霊記念像の制作、建築分野の知見を活かした復興まちづくり事業の協力などを実施しており、なかでも、東京芸術大学が有する文化財保存・修復の技術を活かした被災作品の復元、文化財ドクターの派遣等による支援は特筆される。当該支援により、震災によって甚大な被害を受けた美術館等の所蔵作品を多数修復したほか、津波により消失した、東京芸術大学との縁深い「六角堂」の再建協力を行った。

このほかの取組は、法人の特徴「東日本大震災からの復旧・復興へ向けた取組等」欄にあるとおりである。

《本文》

(I) 教育に関する目標

1. 評価結果及び判断理由

【評価結果】中期目標の達成状況が良好である

(判断理由) 「教育に関する目標」に関する中期目標(3項目)のすべてが「良好」であり、これらの結果を総合的に判断した。

2. 中期目標の達成状況

(1) 教育内容及び教育の成果等に関する目標

【評価結果】中期目標の達成状況が良好である

(判断理由) 「教育内容及び教育の成果等に関する目標」の下に定められている具体的な目標(3項目)のうち、2項目が「良好」、1項目が「おおむね良好」であり、これらの結果を総合的に判断した。なお、「良好」と判定した2項目のうち1項目は「戦略性が高く意欲的な目標・計画」に認定された1計画を含む。

<特記すべき点>

(優れた点)

○グローバル時代に即応した新たな芸術教育実践プロセス等の導入

中期目標(小項目)「学士課程(専門教育) 2. 各芸術領域の伝統的な教育手法や、社会的要請を踏まえた授業を行い、高い芸術性を身に付けさせる芸術専門教育を行う。」について、グローバル時代に即応した領域横断かつ複合型の新しい芸術教育実践、伝統技術と現代における社会実践、国際共同カリキュラム等、多様なプロセスを導入し、教員・アシスタントスタッフ・学生が、ロンドン芸術大学(英国)等の連携協定締結校と大学を行き来し、共同授業・制作・成果発表を行うグローバルアート国際共同カリキュラム等を実施している。

(中期計画 2-1 【3】)

○地域に貢献するアートプロジェクトの継続的实践

中期目標（小項目）「大学院課程 3. 学士課程で身に付けた高い専門性を発展させ、各自の独自性や創造性を向上させる教育研究指導を行う。」について、東京スカイツリーから浅草を結ぶ地域において、複合的な芸術分野のプロジェクトを実施することで、街全体をミュージアム化し、新しい形のコミュニケーションを創出し、地域に貢献する芸術環境拠点の形成と新しい芸術の発信地となる地域創成を目指す芸大・台東・墨田（GTS）観光アートプロジェクトを平成 22 年度から平成 24 年度の間に実施するなど、連携協力による複合芸術教育として、多くのアートプロジェクト等を継続的に実践し、地域に貢献している。

（中期計画 3-2 【6】）

○美術研究科における海外の連携大学との共同授業、制作及び成果発表

美術研究科において、国内及び世界各国で開催される「国際芸術祭（ビエンナーレ・トリエンナーレ）」を舞台に、連携大学（ロンドン芸術大学、パリ国立高等美術学校（フランス）、シカゴ美術館附属美術大学（米国））の教員と学生による多国籍ユニット編成及びコラボレーションによる「共同制作プロジェクト」を各大学の正規の教育課程に位置付けて実行することを目的として、平成 26 年度に「グローバルアート国際共同カリキュラム」構築に向けた連携協定を締結し、海外の優れたアーティストを誘致している。また、平成 27 年度には連携大学と共同授業、制作及び成果発表を行う「グローバルアート国際共同カリキュラム」を開設し、新潟県で開催された国際芸術祭「越後妻有トリエンナーレ」等で成果を発表している。（現況分析結果）

（特色ある点）

○芸術系大学院博士課程学位授与の審査方法・プロセスの在り方の明確化

中期目標（小項目）「大学院課程 3. 学士課程で身に付けた高い専門性を発展させ、各自の独自性や創造性を向上させる教育研究指導を行う。」について、国内における芸術実践系博士プログラム・モデルを構築するため、芸術系大学院における学位授与プロセスの研究を立ち上げ、国内外における芸術系博士課程の学位審査及び授与システムに関する調査、指導体制及び評価体制の研究を行っている。また、平成 24 年度に実技系博士学位授与プログラムの研究成果発表会をシンポジウムとして実施するなど、博士課程学位授与の審査方法・プロセスの在り方の明確化に取り組んでいる。（中期計画 3-1 【5】）

(2) 教育の実施体制等に関する目標

【評価結果】中期目標の達成状況が良好である

(判断理由) 「教育の実施体制等に関する目標」の下に定められている具体的な目標(3項目)のすべてが「良好」であり、これらの結果を総合的に判断した。なお、「良好」と判定した3項目のうち2項目は「戦略性が高く意欲的な目標・計画」に認定された2計画を含む。

<特記すべき点>

(優れた点)

○国際的な卓越教員の招へい

中期目標(小項目)「学士課程・大学院課程共通 1. 学生の創造性を引き出す環境を整備し、専門教育の充実を図る。」について、音楽分野では、英国王立音楽院(英国)、パリ国立高等音楽院(フランス)等の国際交流協定校等から平成27年度に延べ70名の教員を招へいし、学生の個人レッスン時間を大幅に拡充している。また、ベルリンフィルハーモニー管弦楽団等、高等教育機関以外の世界的な芸術機関からも継続的に一線級の音楽家を誘致するなど、国際的な卓越教員を招へいしている。これらの取組により、平成27年度の教員一人当たりの学生数は、大学全体として約2.7名となっている。(中期計画1-1【7】)

○公共的な場における芸術表現教育の実践

中期目標(小項目)「学士課程・大学院課程共通 1. 学生の創造性を引き出す環境を整備し、専門教育の充実を図る。」について、音楽分野では平成27年度に国内の自治体、教育機関、企業等から119件の依頼演奏を受け入れている。また、コンサートを行うだけでなく、伊達市吹奏楽きらめき事業である吹奏楽指導、青淵文庫で聴くファミリーコンサート&たてもののレクチャーのように、訪問地の小・中・高等学校で、演奏指導や音楽普及活動等を実施することで教育研究活動の成果を地域に還元し、公共的な場における芸術表現の教育を実践している。(中期計画1-2【8】)

○芸術と社会との新しい関係を提案する人材を養成する教育体制の整備

中期目標（小項目）「学部・研究科における入学定員、組織等の見直しを行う。」について、アートマネジメント、キュレーション、リサーチの3研究分野を持ち、専門領域によって分かれている芸術文化の様々な実践を横断的かつ有機的に結び付け、戦略的に企画・運営・発信し、芸術と社会との新しい関係を提案する人材を養成する国際芸術創造研究科アートプロデュース専攻の平成28年度設置に向けて取り組んでいる。また、既存の美術研究科・音楽研究科では、実践的に社会と関係し、日本独自の制作手法を強みにした新しい芸術の価値を創出し、発信する人材を育成するグローバルアートプラクティス専攻、オペラ劇場で歌手に必要なとされる歌唱技術、国際的に通用する身体表現及び語学能力等を修得できる、専門的なプログラムを展開するオペラ専攻の平成28年度設置に向けた教育体制の整備を行っている。（中期計画2-2【12】）

○美術学部における卓越教員の招へい

美術学部において、海外からのアーティストユニット誘致に対応して、平成27年度にはロンドン芸術大学、パリ国立高等美術学校、シカゴ美術館附属美術大学から12名の教授等を卓越教員として採用している。（現況分析結果）

○映像研究科における国際通用性のある教育課程の編成

映像研究科において、国際通用性のある教育課程の編成上の工夫として、第2期中期目標期間（平成22年度から平成27年度）に海外から講師を招き、講義やワークショップ等を合計42件行っている。また、南カリフォルニア大学（米国）から通年で教員を招へいし、平成27年度に「映画学論」や「国際映像メディア論」を開講しているほか、アニメーション専攻では、平成23年度から芸術総合学校（韓国）と、平成24年度からは伝媒大学（中国）を加え、日中韓アニメーション共同制作を実施している。（現況分析結果）

○映像研究科における学生制作作品の入選

映像研究科において、第2期中期目標期間に学生が制作した作品が、ザグレブ国際アニメーション映画祭やバンクーバー国際映画祭等の国際的な映画祭で入選している。（現況分析結果）

(3) 学生への支援に関する目標

【評価結果】中期目標の達成状況が良好である

(判断理由) 「学生への支援に関する目標」の下に定められている具体的な目標(1項目)が「良好」であり、これらの結果を総合的に判断した。

＜特記すべき点＞

(優れた点)

○新学生寮の整備及びグローバルサポートセンターの設置

中期目標(小項目)「学生が充実した大学生活を送ることができるよう支援体制を整備し、支援方策を展開する。」について、平成25年度に30室の音楽練習室、16室のアトリエを完備する新学生寮の藝心寮を整備している。平成26年度に専任のコーディネーターやサポートスタッフ等を配置し、国際プロジェクトに係る企画立案及び支援、国際化教育及び海外留学支援、留学生教育に関する調査研究等を行うグローバルサポートセンターを設置している。また、音楽創造・研究センターでは、アントレプレヌール(音楽家のための起業家)支援の領域における国際的な動向を調査するとともに、音楽芸術に関する社会発信方法の開発、新時代の芸術創造を担う人材育成、様々なマニュアル等のツールの作成に取り組み、芸術系大学にふさわしい新しい学生支援の方向性を実現している。

(中期計画1-2【17】)

(Ⅱ) 研究に関する目標

1. 評価結果及び判断理由

【評価結果】中期目標の達成状況が良好である

(判断理由) 「研究に関する目標」に関する中期目標(2項目)のすべてが「良好」であり、これらの結果を総合的に判断した。

2. 中期目標の達成状況

(1) 研究水準及び研究の成果等に関する目標

【評価結果】中期目標の達成状況が良好である

(判断理由) 「研究水準及び研究の成果等に関する目標」の下に定められている具体的な目標(1項目)が「良好」であり、これらの結果を総合的に判断した。

<特記すべき点>

(優れた点)

○各芸術分野の芸術文化向上への貢献

中期目標(小項目)「伝統文化の継承と新しい芸術表現の創造を推進し、我国の芸術文化向上に貢献する。」について、美術分野では、平成25年度に設置したアートイノベーションセンターで、フランスの至宝と呼ばれている貴婦人と一角獣タピスリーを、日本初公開となる展覧会に合わせ、大学の特許技術により現物の質感を忠実に再現し、高精細複製作品として発表している。また、音楽分野では、平成24年度に行った「カーリユー・リヴァー+隅田川」公演において英国の作曲家、ベンジャミン・ブリテンが完成させた教会オペラであるカーリユー・リヴァーをロンドン及びサフォーク州のオーフォードで、英国の演出家、指揮者、スタッフ及び大学の声楽、器楽、邦楽という専攻を越えた教員の連携により、2曲の比較同時上演を行っている。また、映像分野では教員の映画監督作品である岸辺の旅が、平成27年度の第68回カンヌ国際映画祭に出品され、監督賞を受賞するなど、国際的にも高い評価を得ている。(中期計画1-1【19】)

○美術学部・美術研究科における新たな高精度の複製技術の開発

美術学部・美術研究科において、第2期中期目標期間に、デジタル技術と日本画等の伝統技法を融合した新しい高精度の複製技術を開発し、特許を取得している。この「触れる文化財」、「クローン文化財」を制作する技術を活用し、世界遺産にも登録されている高句麗古墳群の巨大な壁画に描かれた「四神図」の複製に取り組み、30年前のフィルムから原寸大の鮮明な壁画画像を蘇らせ、石室全体の復元に世界で初めて成功するなど、その研究成果を多くの文化施設や展覧会において発表している。（現況分析結果）

○映像研究科における水準の高い国際的な賞の受賞

映像研究科において、第2期中期目標期間に受賞した賞の件数は、国際的な映画祭やフェスティバル、学協会からの賞を含めて合計41件、教員一人当たり2.5件となっており、単に国際的な受賞の数が多いというだけでなく、第68回カンヌ国際映画祭「ある視点」部門監督賞の受賞等、国際的に評価の高い賞が含まれている。（現況分析結果）

（特色ある点）

○総合芸術アーカイブセンターの設置

中期目標（小項目）「伝統文化の継承と新しい芸術表現の創造を推進し、我国の芸術文化向上に貢献する。」について、全学的な循環型芸術アーカイブを確立することを目的とする総合芸術アーカイブセンターを平成23年度に設置し、情報システム研究、美術情報（3Dデータ）研究、音響・映像データ研究、大学史文書史料研究の4つのプロジェクトに分かれて、分野を超えて連携を図り、研究を行っている。（中期計画1-3【21】）

○他分野、他領域、他機関と連携した新たな研究創造分野の開発

中期目標（小項目）「伝統文化の継承と新しい芸術表現の創造を推進し、我国の芸術文化向上に貢献する。」について、平成27年度に順天堂大学との間で連携・協力協定を締結して音楽セラピー等の共同研究を実施するなど、他分野、他領域、他機関との連携を通じて、科学技術等を取り入れた新しい研究創造分野を開発している。（中期計画1-5【23】）

(2) 研究実施体制等に関する目標

【評価結果】中期目標の達成状況が良好である

(判断理由) 「研究実施体制等に関する目標」の下に定められている具体的な目標(1項目)が「良好」であり、これらの結果を総合的に判断した。

＜特記すべき点＞

(優れた点)

○海外の大学・研究機関との連携関係の構築

中期目標(小項目)「国内外の芸術諸機関との連携及び教(職)員の研究・研修を活性化する仕組みを充実させる。」について、国際的なネットワークを活かした学生・研究者支援策を更に拡充していくために、文化財の保存修復分野の研究を行っている敦煌研究院(中国)やベルリン芸術大学(ドイツ)等、海外の美術大学、音楽大学及び研究機関と連携関係を構築している。その結果、国際交流協定校・機関数は平成21年度末の43大学・機関から平成27年度末の63大学・機関へ増加しており、世界各地の大学・機関との国際交流を推進している。

(中期計画1-2【25】)

(Ⅲ) その他の目標

1. 評価結果及び判断理由

【評価結果】中期目標の達成状況が非常に優れている

(判断理由) 「その他の目標」に関する中期目標(2項目)のうち、1項目が「非常に優れている」、1項目が「良好」であり、これらの結果を総合的に判断した。

2. 中期目標の達成状況

(1) 社会との連携や社会貢献に関する目標

【評価結果】中期目標の達成状況が非常に優れている

(判断理由) 「社会との連携や社会貢献に関する目標」の下に定められている具体的な目標(2項目)のうち、1項目が「非常に優れている」、1項目が「良好」であり、これらの結果を総合的に判断した。

<特記すべき点>

(優れた点)

○早期教育プロジェクトの実施

中期目標(小項目)「展覧会、演奏会、発表会等により、教育研究成果を広く社会に提供し、芸術文化の振興を図り、地域の活性化に貢献する。」について、第2期中期目標期間に毎年度、企業との共同主催事業である藝大アーツイン丸の内を開催しており、平成27年度に美術学部の学生によるストリートウォールペインティング、教員による計7回の出張講義及びスタインウェイ・ピアノによる藝大コンサート等を行っている。また、音楽分野では日本全国の小中学生を対象に、地元でのレッスンを実施し、幼少期から継続的・段階的に指導を行うことで優れた才能を開花させ、世界への飛躍につなげることを目指す早期教育プロジェクト(EEP: Early Education Project)を実施している。平成25年度に選抜した弦楽・管楽の学生15名と教職員6名をジュネーヴ音楽大学(スイス)に派遣、合同オーケストラを組織し、現地でオーケストラや室内楽の演奏を行っている。また、ジュネーヴ音楽大学の学生・教員を日本に招へいし、大阪及び東京で交流演奏会を実施している。このような企業、自治体、海外の関係機関等との連携により、第2期中期目標期間に213件の受託事業、10件の早期教育プロジェクトを行うなど、芸術に関する多様な実践プロジェクトを実施している。

(中期計画 1-1 【27】)

○音楽学部・音楽研究科における各種演奏会の開催

音楽学部・音楽研究科において、大学附属の演奏藝術センターによる「藝大21」、「奏楽堂シリーズ」及び「藝大プロジェクト」の各種演奏会は、作曲家の全体像を捉える包括的な選曲、商業ベースに乗らないため演奏される機会の少ない作品の演奏、啓蒙プログラム、邦楽アンサンブルを基調とした新しい創造の試み等、大学の特色や強みを活かした企画となっており、個々の教員の個人的な研究活動をベースとしつつ、学生も交えた大学の総力を挙げた取組となっている。
(現況分析結果)

(特色ある点)

○教育研究成果の発表を通じた社会還元

中期目標（小項目）「展覧会、演奏会、発表会等により、教育研究成果を広く社会に提供し、芸術文化の振興を図り、地域の活性化に貢献する。」について、大学美術館では、大学院美術研究科博士審査展等の学部・大学院の卒業・修了時に実施する卒業・修了制作展、博士展を行うなど、第2期中期目標期間に129件の展示会を開催している。また、奏楽堂では、藝大学生オーケストラ定期演奏会等の音楽学部・音楽研究科の教育課程として実施する学内演奏会、修士リサイタル、博士リサイタル、卒業・修了時に実施する卒業演奏会及び大学院学位審査会等、第2期中期目標期間に567件の演奏会等を開催するなど、教育研究成果を社会へ還元している。（中期計画1-2【28】）

(2) 国際化に関する目標

【評価結果】中期目標の達成状況が良好である

(判断理由) 「国際化に関する目標」の下に定められている具体的な目標(3項目)のすべてが「良好」であり、これらの結果を総合的に判断した。
 なお、「良好」と判定した3項目のうち2項目は「戦略性が高く意欲的な目標・計画」に認定された4計画を含む。

＜特記すべき点＞

(優れた点)

○新たな分野横断・融合型研究組織の設置

中期目標(小項目)「徹底した「大学改革」と「国際化」を全学的に断行することで国際通用性を高め、ひいては国際競争力を強化するとともに、これまでの実績を基に更に先導的試行に挑戦し、我が国の社会のグローバル化を牽引するための取組を進める。」について、平成26年度に採択されたスーパーグローバル大学創成支援(大産学)イニシアティブ事業の目標達成に向け、平成27年度に分野横断・融合型の研究を一層推進するため、教育組織と研究組織を分離し、芸術表現学系・芸術理論学系・芸術資源学系の3つの系により構成される教員組織として芸術研究院を新設するなど、研究教育組織の見直しを行い、海外の芸術系大学・機関等から延べ169名のアーティスト・クリエイターを教員・特別講師として招へいしている。(中期計画1-1【31】)

○国際共同カリキュラムの構築への取組

中期目標(小項目)「大学間国際交流協定締結校との連携強化を中心として、戦略的な芸術大学ネットワークを構築する。」について、国際舞台で活躍できる芸術家育成のための人材育成プログラムの開発として、美術分野では平成26年度にロンドン芸術大学、パリ国立高等美術学校及びシカゴ美術館附属美術大学と国際共同カリキュラム(ジョイント・ディグリー)構築に向けた連携協定を締結している。この協定を受けて平成27年度に東京とパリ、ロンドン、シカゴにおいて、共同授業・制作・成果発表を行うグローバルアート国際共同カリキュラムを実施し、27名の学生が参加している。また、音楽分野では平成27年度にリスト音楽院(ハンガリー)と大学間交流協定を締結し、共通学位の構築に向けて協議を進めるなど、国際共同カリキュラムの構築に取り組んでいる。

(中期計画2-1【32】)

○アジア全域における広範なネットワーク形成の推進

中期目標（小項目）「大学間国際交流協定締結校との連携強化を中心として、戦略的な芸術大学ネットワークを構築する。」について、国内及びアジアの芸術系大学との多様な交流を強化し、アジアにおける芸術大学の拠点としての地位を確立するため、平成 22 年度から東京芸術大学アジア総合芸術センター事業を展開している。事業の成果として平成 24 年度に日本、韓国、台湾、モンゴル、インドネシア、ベトナム、タイ、シンガポール及びマレーシアから計 23 大学の学長等を招き、藝大アーツ・サミット 2012 を開催している。また、平成 26 年度に開催した藝大アーツ学生サミット 2014 では、日本、中国、韓国で芸術を学ぶ 81 名の学生が共同制作、演奏会を通して交流を深め、外部に向けて日中韓学生共作の美術・音楽・映像作品を披露するなど、アジア全域におけるより広範なネットワーク形成を推進している。（中期計画 2-2 【33】）

○芸術系大学ブランディング・システムの開発

中期目標（小項目）「大学間国際交流協定締結校との連携強化を中心として、戦略的な芸術大学ネットワークを構築する。」について、国際プレゼンスの確立及び国際発信を目的として、芸術分野固有の観点・指標等に基づき、芸術系大学の相対的な強み・特色等を明確化する芸術系大学ブランディング・システムの開発に取り組んでいる。平成 26 年度に戦略企画インテリジェンスユニットを設置し、近年の芸術系大学の取組、海外における評価制度の実態等、先導的ブランディング・システムの構築に関する指標の整理・予備調査・分析を実施している。また、愛知県立芸術大学、京都市立芸術大学、金沢美術工芸大学、沖縄県立芸術大学に事前調査等を実施し、システム構築の試行を実施したほか、世界大学ランキング等を運営する学外機関とも協議を進め、芸術系大学の評価に係る共同研究に向けた連携体制を構築している。（中期計画 2-4 【35】）

○海外実践型の研修授業の実施

中期目標（小項目）「国際交流増進に結びつく体制等を整備する。」について、海外留学及び海外研修の支援策の一つとして、各国の芸術祭や音楽祭への参加、海外芸術系大学との共同制作・演奏等、教員が専門分野の特色を活かして企画する海外実践型の研修授業 Arts Study Abroad Program (ASAP) を平成 26 年度から実施している。平成 27 年度にカンボジア石造世界遺産現場体験型プログラム等、計 11 件の活動に 86 名の学生が参加している。また、参加学生に海外派遣奨学金を給付するなど、日本人学生の海外留学支援に係る学内体制の整備、教育プログラムの構築・実施、経済的支援制度の拡充及び情報発信等を行い、国際交流増進に結び付く基盤整備を進めている。（中期計画 3-2 【37】）

○美術学部における海外からの教員等の招へい

美術学部において、海外から多数の教員、アーティストを招へいし、特別講義、ワークショップ、研究会を実施しており、平成 27 年度には延べ 23 名の教員及びアーティストを招へいしている。また、国際交流協定校等は平成 21 年度の 31 校から平成 27 年度の 46 校へ増加している。（現況分析結果）

（特色ある点）

○スペシャルソリストプログラム制度の導入

中期目標（小項目）「大学間国際交流協定締結校との連携強化を中心として、戦略的な芸術大学ネットワークを構築する。」について、入試改革及び人材育成プログラム改革の一つとして、高校 2 年生からの飛び入学を起点として展開するスペシャルソリストプログラム（SSP : Special Soloist Program）制度を平成 28 年度から導入することとし、個人レッスンの時間を通常カリキュラムから倍増するなど、5 つの特別カリキュラムを整備している。これにより、最短で学士課程を 2 年早く卒業することが可能となり、入学に年齢制限を設けている海外の大学へ留学できるなど、卒業後の円滑な海外展開に寄与する制度構築に取り組んでいる。（中期計画 2-3 【34】）

《判定結果一覧表》

中期目標（大項目）			判定	特記すべき点
中期目標（中項目）				
中期目標（小項目）				
計画番号	中期計画			
(I) 教育に関する目標			良好	
① 教育内容及び教育の成果等に関する目標			良好	
学士課程（教養教育等） 1. 高度な芸術専門教育を支える人間性の基盤を涵養する教育を行う。			おおむね良好	
1-1【1】	芸術大学における教養教育の在り方についての指針を、平成25年度までに明示する。		おおむね良好	
1-2【2】	教養教育及び芸術専門教育における専門基礎科目の内容、配分、履修方法等について見直しを行い改善する。		おおむね良好	
学士課程（専門教育） 2. 各芸術領域の伝統的な教育手法や、社会的要請を踏まえた授業を行い、高い芸術性を身に付けさせる芸術専門教育を行う。			良好	
2-1【3】	美術学部においては、領域、学科等を超えた横断的な芸術教育の可能性を検討し、専門教育の充実を図る。		良好	優れた点
2-2【4】	音楽学部においては、カリキュラム等の見直しを平成25年度までに行い、専門教育の充実を図る。		おおむね良好	
大学院課程 3. 学士課程で身に付けた高い専門性を発展させ、各自の独自性や創造性を向上させる教育研究指導を行う。			良好	
○ 3-1【5】	実技をともなう芸術分野の博士課程における学位授与の審査方法・プロセスの在り方を、平成24年度までに明確にする。		おおむね良好	特色ある点
3-2【6】	地域社会や産業界、海外関係機関等との連携協力により、実践的な教育研究の場をつくり、複合芸術教育を行う。		良好	優れた点
② 教育の実施体制等に関する目標			良好	
学士課程・大学院課程共通 1. 学生の創造性を引き出す環境を整備し、専門教育の充実を図る。			良好	
○ 1-1【7】	本学の伝統であり、芸術教育に欠かせない、少人数教育、個人指導を着実に実施する教員配置を行うとともに、ロンドン芸術大学等の海外から招聘した一線級芸術家等を併せて配置することにより、指導体制の強化・充実を図る。		良好	優れた点
1-2【8】	国内及び海外に展覧会・演奏会等多様な発表の場を確保し、教育研究活動の成果を積極的に発信する。		非常に優れている	優れた点
1-3【9】	大学美術館の施設や所蔵資料を活用した実践的な授業を展開し、学芸員課程の充実を図る。		おおむね良好	
1-4【10】	教職員や学生の制作・表現活動等を支援するため、ネットワーク環境を整備し、ポータルサイトを構築する。		おおむね良好	
学部・研究科における入学定員、組織等の見直しを行う。			良好	
2-1【11】	学部・研究科毎の委員会等において、社会的状況等を勘案し、入学定員や組織等についての見直しを行う。		おおむね良好	

(注)計画番号の前に○印がある中期計画は、戦略性が高く意欲的な目標・計画を示す。

中期目標（大項目）				判定	特記すべき点
中期目標（中項目）					
中期目標（小項目）					
計画番号	中期計画				
	○	2-2【12】	国際舞台で活躍できる芸術家育成のための新たな大学院組織整備について、平成28年度設置に向けた制度設計を行う。	良好	優れた点
	教育力の向上を図るため、芸術分野の特性に応じたFD等を実践する。			良好	
		3-1【13】	学生による授業評価アンケートを、定期的実施する。	おおむね良好	
		3-2【14】	講評会、公開レッスン等の実施を、教育力評価に活用する。	良好	
		3-3【15】	FDに関する研修会、講演会等を実施する。	おおむね良好	
	③ 学生への支援に関する目標			良好	
	学生が充実した大学生活を送ることができるよう支援体制を整備し、支援方策を展開する。			良好	
		1-1【16】	アドミッションポリシー・教育方針・教育内容等について、印刷物やwebサイトを通じて平成24年度までに具体的に明示する。	おおむね良好	
		1-2【17】	学生支援体制（修学支援、生活支援、各種相談等）を充実させる。	良好	優れた点
		1-3【18】	奨学寄付金の拡充等により、学生への経済的支援を強化する。	良好	
(Ⅱ) 研究に関する目標				良好	
① 研究水準及び研究の成果等に関する目標				良好	
伝統文化の継承と新しい芸術表現の創造を推進し、我国の芸術文化向上に貢献する。				良好	
	1-1【19】	伝統文化や新たな芸術表現創造に関する研究成果を、展覧会や演奏会等を通して広く社会に発信する。	非常に優れている	優れた点	
	1-2【20】	研究プロジェクトの活性化を図り、本学の教育研究成果の社会への還元を図るための基盤を強化する。	良好		
	1-3【21】	本学歴史的資料等の収集・保存体制の見直しを行い、アーカイヴズとしての機能強化、情報発信等の体制を整備する。	良好	特色ある点	
	1-4【22】	芸術分野の他領域の研究者と連携し、複合的領域の研究を実施する。	良好		
	1-5【23】	他分野の研究者及び他機関と連携した学際的領域に関する共同研究等の実施を推進する。	良好	特色ある点	
② 研究実施体制等に関する目標				良好	
国内外の芸術諸機関との連携及び教（職）員の研究・研修を活性化する仕組みを充実させる。				良好	
	1-1【24】	国公立5芸術大学を中心とした連携の拡大とともに私立の芸術系大学とのネットワークを構築し、交流活動を活性化させる。	良好		
	1-2【25】	研究者及び学生の研究交流を充実させるため、国際交流協定締結校を中心にネットワークを強化する。	非常に優れている	優れた点	

中期目標（大項目）				判定	特記すべき点
中期目標（中項目）					
中期目標（小項目）					
計画番号	中期計画				
	1-3【26】	今後の運営費交付金等の動向による財政的制約の中で実施可能なサバティカル制度の内容や導入方法等を検討し、教（職）員の研究・研修の活性化を図る。		おおむね良好	
(Ⅲ) その他の目標				非常に優れている	
① 社会との連携や社会貢献に関する目標				非常に優れている	
展覧会、演奏会、発表会等により、教育研究成果を広く社会に提供し、芸術文化の振興を図り、地域の活性化に貢献する。				非常に優れている	
	1-1【27】	自治体、企業及び海外の関係機関等との連携により、芸術に関する各種プロジェクト、展覧会、演奏会等を実施する。		非常に優れている	優れた点
	1-2【28】	大学美術館、奏楽堂の施設や学内ギャラリー、音楽ホール等で、所蔵品の展示や教育研究成果を発表する展覧会、演奏会等を開催する。		良好	特色ある点
社会人の受入れ、公開講座の実施等を通じて、生涯学習社会の形成に資する。				良好	
	2-1【29】	生涯学習やリカレント教育の観点から、社会人受け入れ方法等の見直しやプロジェクト等を実施する。		良好	
	2-2【30】	専門教育で培ってきたノウハウを生かし、社会のニーズに対応した公開講座を実施する。		良好	
② 国際化に関する目標				良好	
徹底した「大学改革」と「国際化」を全学的に断行することで国際通用性を高め、ひいては国際競争力を強化するとともに、これまでの実績を基に更に先進的試行に挑戦し、我が国の社会のグローバル化を牽引するための取組を進める。				良好	
○	1-1【31】	スーパーグローバル大学創成支援「藝大力創造イニシアティブ」事業の目標達成に向け、分野横断型の教員組織である「芸術研究院」の新設などの教育研究組織改革のほか、海外から40名規模の一線級アーティスト・クリエイターを教員として招聘し、国際芸術祭等の実践的環境を活かした国際共同カリキュラムの実施や学生の海外派遣や留学生支援等国際交流機能強化のためのグローバルサポートセンターの新設など、国内外との連携・ネットワーク基盤強化によるグローバル人材育成プログラム・指導体制の抜本的強化を図るとともに、日本人学生の海外留学をこれまで90人から130人に拡大する。また、上野の文化施設をはじめ、文化庁や東京都・台東区等関係機関、海外一線級アーティスト等との連携による国際共同プロジェクトや国際イベントの実施等を通じた“上野の杜”の国際教育研究拠点化、さらには、国内外の芸術系大学における教育研究活動状況等に係る情報収集・分析の実施等、芸術系大学におけるブランディングシステム構築等の取組を推進する。		良好	優れた点

中期目標（大項目）			判定	特記すべき点
中期目標（中項目）				
中期目標（小項目）				
計画番号	中期計画			
	大学間国際交流協定締結校との連携強化を中心として、戦略的な芸術大学ネットワークを構築する。		良好	
○	2-1【32】	ロンドン芸術大学やベルリンフィルハーモニー管弦楽団等、国際交流協定締結校や海外関係機関等から、世界一線級のアーティスト・クリエイターや優れた教員・研究者を招聘し、ワークショップ、演奏指導、講演、共同プロジェクト等、国際舞台で活躍できる芸術家育成のための人材育成プログラムを開発・実施するとともに、平成29年度導入予定の国際共同カリキュラム構築に向けた協議を行う。	良好	優れた点
	2-2【33】	アジアにおける芸術教育研究の拠点大学となるべく、アジア諸国における人材育成支援のための諸活動を展開するとともに、研究成果発表や情報交換の機会を提供する。	非常に優れている	優れた点
○	2-3【34】	音楽学部においては、飛び入学をはじめとする早期教育制度の導入に向けた制度設計を行う。	おおむね良好	特色ある点
○	2-4【35】	国内芸術系大学及び国際交流協定締結校等との連携・協力により、芸術分野の特殊性を踏まえた芸術系大学の評価・検証システム構築に向けた制度設計を行う。	良好	優れた点
	国際交流増進に結びつく体制等を整備する。		良好	
	3-1【36】	外国人学生・研究者の受入れ体制を構築する。	おおむね良好	
	3-2【37】	日本人学生の海外留学を支援する。	非常に優れている	優れた点

「戦略性が高く意欲的な目標・計画」の取組状況について

(1)	第2期中期目標期間において、実技を伴う芸術分野の大学院博士課程における学位授与の在り方の明確化を目指した計画を進めている。国内における芸術実践系博士プログラム・モデルを構築するため、芸術系大学院における学位授与プロセスの研究を立ち上げ、国内外における芸術系博士課程の学位審査及び授与システムに関する調査、指導体制及び評価体制の研究を行っている。また、平成24年度に実技系博士学位授与プログラムの研究成果発表会をシンポジウムとして実施するなど、博士課程学位授与の審査方法・プロセスの在り方の明確化に取り組んでいる。
(2)	世界一線級のアーティストユニットを誘致し、国際共同カリキュラム構築等を通じた国際水準の芸術系人材育成を推進するとともに、国際的芸術系教育研究拠点としての機能強化を目指した計画を進めている。国際舞台で活躍できる芸術家育成のための人材育成プログラムの開発として、美術分野では平成26年度にロンドン芸術大学（英国）、パリ国立高等美術学校（フランス）及びシカゴ美術館附属美術大学（米国）と国際共同カリキュラム（ジョイント・ディグリー）構築に向けた連携協定を締結している。この協定を受けて平成27年度に東京とパリ、ロンドン、シカゴにおいて、共同授業・制作・成果発表を行うグローバルアート国際共同カリキュラムを実施し、27名の学生が参加している。
(3)	上野の杜を中核とした藝大力創造イニシアティブの展開による国際ネットワーク基盤を活かした国際共同プロジェクトの実施や、芸術系大学におけるブランディングシステムの構築等の取組を通じて、グローバル人材育成機能等を強化するとともに、世界ブランド藝大を目指した計画を進めている。平成26年度に採択されたスーパーグローバル大学創成支援藝大力創造イニシアティブ事業の目標達成に向け、平成26年度に戦略企画インテリジェンスユニットを設置し、近年の芸術系大学の取組、海外における評価制度の実態等、先導的ブランディング・システムの構築に関する指標の整理・予備調査・分析を実施している。平成27年度に分野横断・融合型の研究を一層推進するため、教育組織と研究組織を分離し、芸術表現学系・芸術理論学系・芸術資源学系の3つの系により構成される教員組織として芸術研究院を新設するなど、研究教育組織の見直しを行っている。